

ものづくりや地域の暮らしの説明に見られる言語表現

—日英語比較—

Linguistic Expressions in the Explanation of Traditional Crafts and Local Lifestyles: A Comparative Study between Japanese and English

山田 陽子

YAMADA Yoko

Recently more and more tourists are attracted to activities related to local culture and lifestyles. Among those activities are visiting sake breweries and making traditional crafts. When participating in those activities, participants are given a lot of explanations including the information about the process of making traditional crafts. However, little is known about characteristics of linguistic expressions used in such explanations and how the explanations differ according to languages. The aim of this study is to tackle these questions, focusing on the explanations in Japanese and English. Based on the data derived from several TV programmes, this study reveals how various factors (e.g. process-oriented or result-oriented) influence the choice of linguistic expressions in the explanation of traditional crafts and local lifestyles.

キーワード：ものづくり、地域の暮らし、事態把握、後続談話の主題、聞き手の知識

1. はじめに

人口減少問題に直面している地方では、地域活性化の一助として訪日外国人旅行者の受け入れを進めてきた。しかしながら、2020年1月以降、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、国外はもとより、国内の移動に関しても慎重な行動が求められている。その一方で、経済の活性化を図る必要性から、政府の観光支援事業「GO TO トラベル」や各地方自治体による県民向けの宿泊割引キャンペーンなど、さまざまなキャンペーンが企画、実施されてもいる。

現在、新たな旅行スタイルとして、物見遊山型の観光ではなく、「1つの地域に滞在し、その土地の文化や暮らしを体感しじっくり楽しむ滞在型観光」（「観光白書（令和3年版）」（観光庁）、p. 71）や、新型コロナウイルス感染症収束後に現地への来訪につなげるのが期待されるオンラインツアーなどが注目されている（「観光白書（令和3年版）」（観光庁）。また、将来的な海外からの誘客につなげるため、『自然』『アクティビティ』『文化体験』（「観光白書（令和3年版）」（観光庁）、p. 126）のうち2つ以上の要素で構成されるアドベンチャーツーリズムの推進

や、日本政府観光局の SNS での疑似動画体験などが行われている（「観光白書（令和3年版）」（観光庁））。

こうした滞在型観光やオンラインツアーなどにおいては、例えば、酒蔵見学やものづくり体験などの場面でもものづくりや地域の文化、暮らしを紹介する人材が求められる。大都市圏では、外国語で説明する場合は、資格を有する通訳ガイドがいるが、地方においてはその数は限られているため、例えば学生や市民がボランティアガイドとして活躍することが期待されるだろう。

これまで、ツーリズム談話（discourse of tourism）に関する研究は、その地域を訪れる可能性のある旅行者にその地域の情報を提供するだけでなく、その地域の魅力を発信し、訪れるように誘うという性質をツーリズム談話が有する点に着目した研究が多い。これらの研究では、英語で書かれたウェブサイトなどをさまざまな手法を用いて分析している（例えば、Pierini 2009、Hallett and Kaplan-Weinger 2010、Francesconi 2014 など）。しかし、体験型プログラムへの関心が増してきている中、酒蔵見学やものづくり体験など地域の文化や暮らしを体験するプログラムに参加している参加者への説明で使われる言語表現にどのような特徴があるのか、また言語によってどのような違いがあるのか、といった問いについてはまだ十分には検討されていない。

本稿は、日本語と英語の場合に焦点をあて、説明者がものづくりや地域の文化、暮らしを日本語で説明する場合と英語で説明する場合に見られる言語表現を比較、分析することにより、上記の問いを検討することを目的とする。なお、体験型プログラムでは、説明者によるものづくりや地域の文化、暮らしについての説明がある一定の長さ行われる場面だけでなく、説明者による説明の後もしくは説明中にプログラム参加者が質問し、説明者が答えるといったインタラクティブな場面も見られる。しかし、本稿では分析対象をものづくりや地域の文化、暮らしが説明される場面に限定し、検討する。

本稿の構成は次の通りである。第2節で先行研究を概観した後、第3節で本稿のデータについて説明する。第4節ではデータの分析結果を述べ、第5節では分析結果から示唆されることを論じる。第6節は本稿のまとめである。

2. 先行研究

Clark and Brennan (1991)は、コミュニケーションの特徴として、共存性、可視性、可聴性、共時間性、同時性、連鎖性、見直し可能性、推敲可能性を挙げている。これに基づく、旅行者が現地に来て体験する場合と、オンラインで参加するオンラインツアーとでは、コミュニケーションの種類が異なる。旅行者が現地に来て体験する場合は、通常、対面型コミュニケーションであり、共存性、可視性、可聴性、共時間性、同時性、連鎖性を含むと考えられる。一方、オンラインで参加するオンラインツアーの場合は、非対面型コミュニケーションであるため、対面型コミュニケーションにはあつた共存性を欠く。また、常に説明者にオンラインツアー参加者が見えているとは限らないことから、可視性が低い可能性がある。しかし、説明者がもの

づくりや地域の文化、暮らしを説明する場面があるという点では、対面型コミュニケーションと非対面型コミュニケーションは共通している。では、説明者の説明で使われる言語表現にはどのような特徴があるのだろうか。

ツアーガイドが歴史的建造物や地域の文化を旅行者に紹介・説明する際に見られる話しことばの特徴について考察した研究は管見の限り少ないが、Rosypalová (2012)はそうした研究の一つである。Rosypalová(2012)は、プラハでチェコの文化と歴史に精通している資格を有するツアーガイドによる旅行者への建造物や歴史などの説明や旅行者へのアドバイスなどから成る英語の話しことばの談話と、建造物や歴史などの説明や旅行者へのアドバイスなどから成る印刷されたガイドブックとオーディオガイドにおける英語の書きことばの談話の間に見られる言語的特徴に焦点をあて、分析した。そして分析の結果、話す内容が前もって準備されておりかつ繰り返し話されるという性質から、ツアーガイドの話しことばの談話には、ガイドブックという書きことばの談話に典型的な語彙の特徴と文法的特徴がいくつか見られるとしている。例えば、Rosypalová (2012)によると、一般的に受動文は書きことばに見られる特徴であり日常的な話しことばではめったに使われないが、分析対象とした話しことばの談話と書きことばの談話の両方で受動文が頻繁に使用されていたという。そして、その第一の理由として、ツアーガイドやガイドブックの執筆者が過程そのものよりも行為の結果を強調することをしばしば好むことを挙げ、第二の理由として、行為者の役割がしばしば重要ではないことを挙げている (Rosypalová 2012: 78)。Rosypalová(2012)は、ツアーガイドの話しことばの談話とガイドブックやオーディオガイドにおける書きことばの談話を比較・分析することを研究目的としていることから、言語によってどのような違いがあるのかは考察の対象にはなっていない。

3. 分析データ

本稿の目的から、同じ内容を日本語と英語で説明している場面を分析対象とすることが望ましい。こうしたことから、本稿は、4本のテレビ番組 (Core Kyoto (2021年9月30日放送(NHK BS1))、(2021年10月14日放送(NHK BS1))、Journeys in Japan (2021年10月13日放送(NHK BS1))、Trails to Oishii Tokyo (2021年10月8日放送(NHK BS1))) 中のナレーション部分のうち、ものづくりに関する説明や地域の暮らしなどの紹介を日本語と英語で視聴することができる部分を選び、そこで用いられている言語表現を比較、考察する。具体的には、日本語文155文、英文156文を本稿の分析対象とする¹。なお、これらの番組では、ものづくりに関する説明は、ナレーターによる説明のほかに、リポーターと作り手のやり取りの中などで作り手によ

¹ 本稿では分析データとなっている日本語の文の総数と英語の文の総数が異なるが、これは、例えば、日本語では2文で表されているところが、英語では1文で表されている場合や、逆に日本語では1文で表されているところが、英語では2文で表されている場合があるためである。

てなされていることもあるが、日本語と英語の両方で聴くことができなかつたため、本稿では分析対象から除くことにした。

4. 日本語で説明する場合と英語で説明する場合に見られる言語表現の比較

ものづくりに関する説明や地域の暮らしなどの紹介を日本語で行う場合と英語で行う場合に見られる言語表現を比較したところ、いくつかの点で言語による違いが見られた。

4.1. 事態把握の違いを反映した言語表現の違い

日本語では主語が省略された能動文で述べられ、英語では動作主が省略された受動文で述べられている例が見られた。次の例を見てみよう²。

(1) a. 炉で3時間ほど鉄を熱し溶かす。真っ赤に溶けた鉄をひしゃくですくい
 鑄型に流し込む。

b. The iron is heated for three hours until it is fully melted.

The red hot liquid is poured into a scoop, then into a mould.

(Core Kyoto (2021年9月30日放送(NHK BS1))より)

(1) は、茶釜の制作過程を説明したナレーションの一部である。(1a) の2つの日本語文は、主語が省略された能動文である。(1a) の部分は、英語でのナレーションでは、(1b) のように、動作主が省略された受動文で表されている。

興味深いことに、日本語では主語が省略された能動文で表され、英語では動作主が省略された受動文で表されている例が特に見られるのは、(1) のように、制作過程、作業の工程を説明する場面である。本稿のデータ（日本語文155文、英文156文）のうち、制作過程、作業の工程を説明する場面は、日本語文が計75文、英文が78文あったが、このうち、12例で、日本語では主語が省略された能動文で表され、英語では動作主が省略された受動文で表されていた³。一方、地域の暮らしや工芸品の紹介などの場面は、日本語文が計80文、英文が78文あったが、このうち、日本語では主語が省略された能動文で表され、英語では動作主が省略された受動文で表されていたのは3例だった。制作過程、作業の工程を説明する場面で、日本語では主語が

² 英語のナレーションの部分は、筆者が聞き取って書き起こしたものである。日本語のナレーションの部分も筆者が聞き取って書き起こしたものであるが、漢字の使用などは字幕での表記を参考にした。

³ 4.1節から4.3節では、日本語で説明する場合の言語表現と英語で説明する場合の言語表現の比較を単文で基本的に行った。しかし、従属節と単文（日本語では複文の従属節で表されているが、英語では単文で表されている）で比較した例が1例ある。これは、伝達内容が対応していたためである。この例は、この12例のうちの1例である。

省略された能動文で表され、英語では動作主が省略された受動文で表されるという言語間の違いが見られる傾向は何を意味しているのだろうか。

英語の能動文は、話し手の視点が文の主語の指示対象に寄っている場合でも、目的語の指示対象に寄っている場合でも、あるいは中立の視点を取っている場合でも用いられるのに対し、英語の受動文は、主語の指示対象に話し手が視点を寄せているときにのみ用いられる文である(久野・高見 2005)。また、久野・高見(2005: 47)は、英語の受動文は、「その動詞が表わす動作が、その主語の指示対象の状態に変化をもたらしたことに関心を寄せる構文である」という。これらのことから、日本語では主語が省略された能動文で表され、英語では動作主が省略された受動文で表されるという違いが見られる場面では、英語の場合、話し手は、原料の状態が変化したことに関心を寄せ、それゆえ原料寄りの視点を取りながら、制作過程、作業の工程を順番に述べていると考えられる。

一方、日本語での制作過程、作業の工程の説明の場合、話し手は主語である作り手の立場から制作過程、作業の工程を順番に述べていく形をとっている。話し手は、主語である作り手が原料に対して行う行為に関心を寄せていると考えられる⁴。

制作過程、作業の工程の説明の場合は、最初に～、次に…、というように、順番に工程を説明していくことになるため、最初にどこに関心を寄せて説明するのかを決めると、そこからふれずに工程を説明していくことにより、結束性の高い談話が構築されることが考えられる。そのため、ひとたび話し手が、動作主である作り手が原料に対して行う行為に関心を寄せる立場から制作過程、作業の工程を言語化すると決めると、「(作り手が)最初に～する、次に…する」という、作り手を主語とする能動文が続き、ひとたび原料の状態が変化したことに関心を寄せる立場から制作過程、作業の工程を言語化すると決めると、「最初に原料が～される、次に…される」という受動文が続いて談話が構築される傾向にあると考えられる。

ここまで述べてきた、原料の状態が変化したことに関心を寄せて述べるのか、それとも動作主である作り手が原料に対して行う行為に関心を寄せて述べるのかという違いは、それぞれの言語で好まれる事態把握があり、英語は結果重視、日本語は過程重視である(例えば、影山 1996、2021)という違いを反映したものとして捉えることができる。行為を表す動詞の意味には、行為の結果の達成までを含意する動詞と、行為だけを表わし、行為の結果の達成までは含意しない動詞がある(池上 1981)。日本語と英語の場合、どちらのタイプの動詞もあるが、次のような例もある。

⁴ 主語が省略されていることから、話し手の関心は、主語にというよりは主語である作り手が行う行為に寄せられていると考えられる。

- (2) a. 燃ヤシタケレド、燃エナカッタ
b. *I burned it, but it didn't burn.

(池上 1981:266)

どちらか一方の言語の動詞は行為の結果の達成までを含意するが、もう一方の言語の動詞は達成までを含意しないとき、池上 (1981) によると、日本語と英語の動詞の場合は、(2) のように、行為の結果の達成までを含意するのは常に英語の動詞であり、必ずしも達成を含意しないのは常に日本語の動詞である。また、影山 (2021:10) は、英語の基本が点的な捉え方であり、日本語の基本が線的な捉え方であることを提示し、同じ事態を表す場合でも、「英語が行為や変化の結果という<点>に注目するのに対して、日本語は変化の進み具合という<線的>な流れに重点を置いて表現する傾向がある」としている。本稿のデータにおいても制作過程、作業の工程の説明の場面においてこの特徴が見られ、原料の状態が変化したことに関心を寄せて述べるのか、それとも動作主である作り手が原料に対して行う行為に関心を寄せて述べるのかという違いとなって表れているのである。

4.2. 自動詞か他動詞か

日本語では自動詞を使って述べられ、英語では他動詞を使って述べられている例が全部で 7 例あった。このうち、制作過程、作業の工程を説明する場面で 4 例、地域の暮らしや工芸品などの紹介の場面で 3 例あった。これらの例を詳細に見てみると、場面によって異なる特徴が見られる。制作過程、作業の工程を説明する場面においては、英語の他動詞を使っているとき、主語が無生物主語である傾向がある (4 例中 4 例) のに対し、地域の暮らしや工芸品などを紹介する場面においては、英語の他動詞を使っているとき、主語は有生物である傾向が見られた (3 例中 3 例)。このため、以下では、場面ごとに例を考察することにし、まず、制作過程、作業の工程を説明する場面の例を考察することにする。そしてその後、地域の暮らしや工芸品などの紹介の場面の例を考察する。

次の例を見てみよう。

- (3) a. 研ぎ上げると水玉模様ができるのです。
b. Polishing the surface reveals the water droplet pattern.
(Journeys in Japan (2021 年 10 月 13 日放送(NHK BS1)) より)

(3a) は、「研ぎ上げると」という他動詞「研ぎ上げる」を使ったト節と「水玉模様ができるのです」という自動詞「できる」を使った節から成り立つ複文である。ト節は、主節で述べられている事態を引き起こす契機となる事態を並列的につないでいる (近藤 2018)。(3a) の部分は、

英語のナレーションでは、(3b) のように、ト節で表されていた事態を主語とし、他動詞 *reveal* を使って表している。

無生物主語の構文は日本語では好まれない構文であるが、英語では好まれる構文である。日英語のこうした違いについてはさまざまに議論されてきているが、斎藤(2001)は、Ikegami (1990) をもとに⁵、無生物主語を取るかどうかということとその構文が結果指向かどうかということとは関係しており、構文が結果指向である場合に限り、無生物主語を取ることができるとしている。そして、使役動詞以外の動詞が使われた文も取り上げながら、英語の無生物主語の構文では、「その強い結果焦点指向により、概念構造において無生物の行為性が背景化しているのではないかと」(斎藤 2001 : 93) 論じている。

斎藤(2001)の分析に基づくならば、(3b)の無生物主語の文は、研いだ結果に話し手が関心を寄せている文と解釈することができ、4.1節で述べた、制作過程、作業の工程の説明の場面で、英語の場合、原料の状態が変化したことに関心を寄せて述べるという特徴がここでも観察されると言える。

次に、地域の暮らしや工芸品などの紹介の場面における言語表現を検討する。次の例を見てみよう。

- (4) a. 真冬に作られてきた伝統の保存食があります。切った餅にゴマと食紅などを混ぜ込んだ干しもちです。
- b. In that weather, the people of Tsugaru like a make of food that's preserved in a traditional way. They bounce sticky rice to make mochi mixed with sesame seeds and flecks of food colouring and then cut it in a square shape.

(Journeys in Japan (2021年10月13日放送(NHK BS1)) より)

(4)はある地域の伝統的な保存食の紹介のナレーションの出だしの部分である。この後に、地元の人とリポーターのやり取り、そしてナレーターによる作り方の説明が続く。本稿では、(4)は作り方の工程を説明しているのではないことから、地域の暮らしに関する紹介の部分として扱った。(4a)の最初の日本語文は自動詞「ある」を使った文である。この部分は、英語のナレーションでは、(4b)のように、他動詞 *like* を使った文で表されている。

地域の暮らしや工芸品などの紹介の場面で、日本語では自動詞を使って述べられ、英語では

⁵ Ikegami (1990) は、Survey of English Usage コーパスにおける使役動詞 *make*, *get*, *have*, *let* を分析し、*get*, *have*, *let* の場合は無生物主語の文が一例もなかったのに対し、*make* の場合は 89 例中 60 例が無生物主語であること、また主語が人の場合も一般的に意図性を欠いていることを明らかにしている。そして、使役動詞 *make* の文の主語が一般的に動作性を欠くということは、使役行為の過程よりもその結果に焦点化させる効果があるとしている。

他動詞を使って述べられているとき、3 例中 3 例で英語の他動詞文の主語が有生物であった。このことは、一見すると、日本語では動きや変化を表さない傾向があるところで、英語では動作主の動作が表されているように見えるかもしれない。しかし、英語の他動詞文の他動性 (transitivity) の程度に着目してみると、実はそうとは限らないことがわかる。

Hopper and Thompson (1980)は他動性を程度差のあるものとして捉える先駆的な研究であると言えるが、他動性のパラメータとして、下の (5) の 10 のパラメータを提唱し、個々の節 (clause) はパラメータと関係づけて捉えることによって、他動性の高いものから他動性の低いものまであるとしている (Hopper and Thompson 1980: 252) ⁶。

(5)	HIGH	LOW
A. PARTICIPANTS	2 or more participants, A and O.	1 participant
B. KINESIS	action	non-action
C. ASPECT	telic	atelic
D. PUNCTUALITY	punctual	non-punctual
E. VOLITIONALITY	volitional	non-volitional
F. AFFIRMATION	affirmative	negative
G. MODE	realis	irrealis
H. AGENCY	A high in potency	A low in potency
I. AFFECTEDNESS OF O	O totally affected	O not affected
J. INDIVIDUATION OF O	O highly individuated	O non-individuated

(5) のパラメータに基づくと、例えば、(6b) は、(5) の B の「Kinesis (能動性)」については action (動作)、C の「相 (Aspect)」については telic (完了)、D の「Punctuality (瞬時性)」については punctual (瞬時)、I の「Affectedness of O (対象が受ける影響性)」については影響を受ける、J の「Individuation of O (対象の個別性)」については個別性が高い、指示対象的、有生物、固有の、といった特性を有することから、(6b) の方が (6a) よりも他動性の程度がずっと高い (Hopper and Thompson 1980: 253)。

- (6) a. Jerry likes beer.
b. Jerry knocked Sam down.

(Hopper and Thompson 1980: 253)

⁶ (5) における A は Agent、O は Object を指している (Hopper and Thompson 1980: 252)。

本稿のデータで地域の暮らしや工芸品などの紹介の場面に見られる、日本語では自動詞を使って述べられ、英語では他動詞を使って述べられている3例について、英語の他動詞文が表す他動性の程度に注意して見てみると、必ずしも動作主の動作が表されているとは限らないことがわかる。例えば、(4b)の1つ目の文(=likeが使われている文)は、他動性が低く、どちらかという状態を表していると考えられる。また、ほかの2例については、(5)のパラメータに基づくと、一つは他動性が高く、もう一つは他動性が高くなかった。このことから、日本語では動きや変化を表さない傾向にあるところで、英語では他動詞を使って述べられていても、そうした英語の他動詞文が必ずしも動作主の動作を表しているとは言えないということがわかる。地域の暮らしや工芸品の紹介は、歴史的背景や現在の状況などが述べられる傾向にある。そのため、制作過程、作業の工程の説明の場面とは異なり、結果重視か過程重視かといった事態把握の違いは起こりにくいのかかもしれない。

4.3. 後続談話の主題導入に用いられる言語表現の違い

日本語では分裂文で述べられ、英語では分裂文を使わずに述べられている例が13例あった⁷。次の例を見てみよう。

- (7) a. 遊び心と自由な発想でスタッフとともに生み出したのが組みひものアクセサリーだ。
 b. With the sense of playfulness and free thinking, he and other staff members began to arrange kumihimo accessories.

(Core Kyoto (2021年10月14日放送(NHK BS1))より)

- (8) a. 護摩を焚くのは修験者。その昔多くの修験者が愛宕山で修業を重ねたことに由来する。
 b. This ritual is carried out by yamabushi, or mountain ascetics.
 Long ago Mt. Atago was home to many yamabushi who practised their ascetic discipline as hermits on this secret mountain.

(Core Kyoto (2021年9月30日放送(NHK BS1))より)

(7a)は分裂文である。(7a)の分裂文は、「組みひものアクセサリーを遊び心と自由な発想でスタッフとともに生み出した」という非分裂文における「組みひものアクセサリー」を述語の

⁷ 本稿は、砂川(2005)に倣い、「～のは...だ」文と「～のが...だ」文の両方を分裂文として扱うことにする。

位置に取り出し、それ以外の部分を主語にしている⁸。また、(8a) の 1 文目は分裂文である。

(8a) の分裂文は、「修験者が護摩を焚く」という非分裂文における「修験者」を述語の位置に取り出し、それ以外の部分を主語にしている。(7a)、(8a) で非分裂文ではなく分裂文が選択されているのはなぜだろうか。

砂川 (2005) は、「N1 は N2 を V」、「N1 が N2 を V」という 2 つの非分裂文と、「N2 を V のは N1 だ」、「N2 を V のが N1 だ」という 2 つの分裂文という計 4 つのタイプの文を用いて行った談話展開テストで得られた作文データを分析し、分裂文の直後の方が非分裂文の直後よりも、N1 の出現が多いという結果を得ている。そして、この結果について、文末で表された指示対象は、「最も記憶に残りやすく、また後続の談話に持続されやすい」(砂川 2005 : 164) ことをふまえて、同じ指示対象の場合でも、非分裂文で主語の位置にあるときよりも、分裂文で文末に置かれることによって、「後続情報文末の原理」(砂川 2005 : 130) が満たされ、後続の談話で「語り継ごうとする圧力が高まった」(砂川 2005 : 165) ためと推測している。

本稿のデータでは、日本語では分裂文で述べられ、英語では分裂文を使わずに述べられている例が全部で 13 例あったが、このうち 10 例で文末に表された指示対象が後続の談話で語りつがれていると解釈できた。これら指示対象は、日本語の場合、非分裂文では文末で表されないため、「後続情報文末の原理」(砂川 2005 : 130) を満たすには、分裂文を使用しなければならない。話し手はものづくりや地域の文化、暮らしについて説明するとき、これから具体的には何について説明するのかを聞き手に明確にするため、後続の談話で主題 (topic) として語りつがれる指示対象を文末で表すことができる分裂文を使用し、これから説明しようとする主題を導入していると考えられる。

一方、日本語では分裂文で述べられていた例は、英語では、(7b)、(8b) のように、分裂文を使わずに表されていた。これは、英語では、分裂文以外の文で後続談話の主題となる指示対象を文末で表すことができるためであると考えられる。例えば、(7b) では、英語の基本語順である SVO の語順の文で、後続談話の主題となる指示対象を文末に表している⁹。また、(8b) では、受動文で後続談話の主題となる指示対象を文末で表している¹⁰。

⁸ 日本語は比較的語順が自由な言語であり、語順を変えても同じ事態を表す文が複数存在しうる。(7a) の分裂文に対応する非分裂文としては、「組みひものアクセサリーを遊び心と自由な発想でスタッフとともに生み出した」以外にも、「遊び心と自由な発想で組みひものアクセサリーをスタッフとともに生み出した」、「遊び心と自由な発想でスタッフとともに組みひものアクセサリーを生み出した」、など複数の文が考えられうる。

⁹ (7) では後続の文を挙げていないが、組みひもを使ったアクセサリーをいくつか紹介する文が後続している。

¹⁰ (8b) の 1 文目が能動文ではなく受動文が用いられている理由は、情報構造の観点からも説明される。(8b) の受動文における主語の指示対象は前文にも出現しているため、情報構造上は、例えば、Prince (1992) の分類では談話上旧 (discourse-old)、Chafe (1994) の分類では既知情報 (given information) である。一方、by に続く動作主を表す名詞句は、Prince (1992) の談話上新 (discourse-new)、Chafe (1994) の新情報 (new

日本語では、文末に表された指示対象が後続談話の主題となっていた例が10例あったが、このうち8例で、英語では分裂文ではない文を用いることによって後続談話の主題となる指示対象を文末で表すことができていた。

4.4. 聞き手の知識を反映した言語表現

話し手は、聞き手がすでに知っていることは何か、聞き手はどのような認知状態にあるのかといったことなどを考えながら言語表現を選択し、使用している。4.4節では、話し手、聞き手、対象との関係に着目して、本稿のデータにおける言語表現を見ていく。

ものづくりに関する説明や地域の暮らしなどの紹介においては、説明者である話し手は説明の過程で、ものづくりで使われる原料や技法などを談話に導入しながら説明を展開していく。話し手はこうした指示対象を聞き手が知っているのかどうかを推し量りながら、指示対象を談話に導入する。話し手が聞き手の知識を推し量りながら言語表現を選択し使用しているということは、文化背景を異にする人に説明する場合には特に重要になってくる。そのため、英語での説明のときは、日本語での説明のとき以上にどの言語表現ならば聞き手が指示対象を認識できるのかが課題となりうる。

話し手が談話に初めて指示対象を導入するときの言語表現に注目してみると、まず、本稿の日本語のデータでは、制作過程、作業の工程の説明の場面で述べられる技法について説明するときに、「～という」の使用が見られた¹¹。(本稿の日本語のデータでは、「～という」がついた例が5例、「～と呼ばれている」がついた例が1例あった。このうち4例が「○○という技法」というように、技法についての説明で「～という」が使われていた。) また、この部分に対応する英語のデータでは、日本語の例6例のうち3例で、「～という」に相当する *called* が用いられていた。

次に、日本語で説明する場合とは異なり、英語で説明する場合には、(i) 日本語表現とそれを言い換えた英語表現を使用し、指示対象を指し示す、(ii) 聞き手がより認識できると考えられる表現に置き換える、という方略が見られた。例えば、4.3節の(8)は(i)の方略が取られ

information)である。Biber et al. (1999: 941)は、byが付く受動文が使われる語用論的要因の一つとして、情報構造を挙げている。そして、コーパスデータの分析結果として、byが付く受動文の大半の例で、byに続く動作主を表す名詞句よりも主語の方が旧情報の程度が高いことを指摘している。

¹¹ 日本語では、聞き手が知らないことが話し手に明らかな場合、もしくは聞き手は知らないが話し手が知っている場合には、「○○という人」のように、「～という(って)」を固有名詞につけ、普通名詞にして導入する必要がある(田窪2010)。英語では、“a guy called James”などにおける*called*がこれに相当する。実際には、聞き手が知っているかどうかという点について話し手は正確には把握しているとは限らないため、聞き手は知っているが話し手は思い、「～という(って)」を固有名詞につけなかったが、実は聞き手は知らないことであったということや、逆に聞き手は知らないが話し手は思い、「～という(って)」を固有名詞につけたが、実は聞き手は知っていることだったということが起こりうる。

た例である。(8)では、日本語での説明では、「修験者」を使用して指示対象を指し示しているのに対し、英語での説明では、日本語表現とそれを言い換えた英語表現を使用して指示対象を指し示している。本稿のデータでは、(i)の例が(8)を含め3例見られた。

また、(ii)の例として、(9)を挙げることができる。

- (9) a. 日本でかんざしや櫛などの装身具が発展したのは江戸時代。庶民の文化が花開き女性たちが広く装いを楽しむようになってからのことだ。
- b. Hair pins and combs became trendy accessories in the 17th century, when popular culture began to bloom. It was the time when women began to take pleasure in dressing their hair with a sense of flare.

(Core Kyoto (2021年10月14日放送(NHK BS1))より)

(9b)では、「江戸時代」という表現ではなく、“the 17th century ~”と、日本の歴史の時代区分になじみのない人によりわかりやすい表現が用いられている。本稿のデータでは、(ii)の例が(9)を含め3例見られた。いずれも日本の歴史区分に関わる表現や歴史上の地名、呼び名に関する表現だった。

5. 考察

前節ではものづくりに関する説明や地域の暮らしなどの紹介を日本語で行う場合と英語で行う場合に見られる言語表現を比較、分析してきた。前節での分析結果をもとに、ものづくりに関する説明や地域の暮らしなどの紹介を日本語で説明する場合と英語で説明する場合の留意点について考察する。

まず、前節での分析結果から、話し手が使う構文は事態把握の仕方や後続談話への主題導入の仕方を反映したものであることが明らかになった。このことは、ある言語で説明する際に能動文が用いられていたから別の言語で説明する場合も能動文を用いるといったことや、ある言語で説明する際に分裂文が用いられていたから別の言語で説明する場合も分裂文を用いるといったことが必ずしも適切ではないことを示している。構文選択に関わるさまざまな要因を理解する必要があることが確認されたと言えよう。

次に、前節での分析の結果、話し手が聞き手の知識を押し量りながら言語表現を選択し使用する際に用いる方略の一端が明らかになった。ツーリズム談話における言語表現の特徴の一つとして、現地の言語や方言の使用が指摘されている。第2節でふれたように、Rosypalová(2012)は、ツアーガイドの英語の話しことばの談話と、ガイドブックとオーディオガイドにおける英語の書きことばの談話を分析しているが、分析対象としたデータにおける語彙的特徴の一つとして、文化特有の語の使用頻度が高いことを明らかにしている。そして、対応する英語表現が

ない場合だけでなく、対応する英語表現がある場合でも現地の言語（この場合はチェコ語）が使われている例をいくつか挙げている。Rosypalová (2012: 44)は、対応する英語表現がある場合でもチェコ語の表現が使われる理由として、よりオーセンティック（authentic）であるためにそして旅行者がチェコ語の単語をいくつか知る手助けとなるために、ツアーガイドがチェコ語の表現を使うことを好んでいると述べている。さらに、チェコ語の表現と英語の表現が併記されている書きことばの例もいくつか挙げている。

4.4節からわかるように、本稿のデータでは、日本語で説明する場合とは異なり、英語で説明する場合には、日本語表現とそれを言い換えた英語表現を使用し、指示対象を指し示す、という方略が見られた（例えば、(8b)）。この方略は、文化特有の言語表現や説明の対象となっているものづくりに関する表現が談話に導入される場面のいくつかで見られた。日本語表現とそれを言い換えた英語表現を使用し、指示対象を指し示す、という方略を取ることで、Rosypalová (2012)が述べているような、聞き手が日本語表現を知る手助けとなる機会の創出につながることも期待されるが、実際の説明の場面においては、英語での説明の中にどの程度日本語表現を使うのか、そしてどの表現を日本語で導入するのかが、聞き手の反応を見ながら話し手が臨機応変に対応していくことになるだろう。また、特に説明の対象となっているものづくりの分野で用いられる専門的な用語については、説明者が作り手とは異なる場合には、作り手の意向も聞きながら、検討することも必要になるかもしれない。

6. おわりに

本稿は、テレビ番組のナレーション部分のうち、ものづくりに関する説明や地域の暮らしなどの紹介を日本語と英語で視聴することができる部分を分析データとし、日本語で説明する場合と英語で説明する場合に見られる言語表現を比較、分析してきた。分析の結果、次の3点が明らかになった。

第1に、制作過程、作業の工程の説明の場面において、日本語と英語の事態把握の仕方の違いが見られる。そして、その違いは、原料の状態が変化したことに関心を寄せて述べるのか、それとも動作主である作り手が原料に対して行う行為に関心を寄せて述べるのかという違いとなって表れている。それぞれの言語で好まれる事態把握があり、英語は結果重視、日本語は過程重視であることがこれまで言語学の領域の研究で指摘されてきている（例えば、影山 1996、2021）が、本稿の分析結果は、日英語の間に見られる事態把握の仕方の違いが、ものづくりに関する説明の場面でも見られることを実証的に示している。

第2に、話し手はこれから具体的に何について説明するのかを聞き手に明確にするため、後続談話の主題となる指示対象を文末で表すことができる構文を選択し使用している。日本語と英語とでは文の基本語順が異なることなどから、後続談話の主題導入に用いられる言語表現が異なる。

第3に、話し手は聞き手の知識を推し量りながら言語表現を選択し使用しているが、英語で説明する場合には、日本語で説明する場合には見られない方略が見られる。このことは、英語での説明のときは、日本語での説明のとき以上にどの言語表現ならば聞き手が指示対象を認識できるのかが課題となりうることを示している。

現在、新型コロナウイルス感染症の収束後を見据え、各地域で国内外からの来訪者の増加に向けた取り組みが始まっている。酒蔵見学やものづくり体験など地域の文化や暮らしを体験するプログラムへの関心が増している中、旅行者が実際に現地に来て体験するのか、それともオンライン上で参加するのか、その参加形態はさまざまであろうが、酒蔵見学やものづくり体験などの場面において、ものづくりや地域の文化、暮らしを説明する人材がますます求められること、そしてそうした人材として学生ボランティアガイドや市民ボランティアガイドが活躍することがますます期待されることは予想に難くない。本稿の分析結果はそうした人材の育成の一助となるものである。

本稿では分析対象をものづくりや地域の文化、暮らしが説明される場面に限定し、検討した。説明者による説明の後もしくは説明中にプログラム参加者が質問し、説明者が答えるといったインターアクションの場面も含め、酒蔵見学やものづくり体験といった体験プログラム全体でどのように談話が構築されているのかを考察することを今後の課題としたい。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP19K00816 の助成を受けたものである。

参考文献

- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Essex: Longman.
- Chafe, Wallace L. (1994) *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Clark, Herbert H. and Susan E. Brennan (1991) Grounding in communication. In: Lauren B. Resnick, John M. Levine and Stephanie D. Teasley (eds.) *Perspectives on Socially Shared Cognition*, 127-149. Washington DC: American Psychological Association.
- Francesconi, Sabrina (2014) *Reading Tourism Texts: A Multimodal Analysis*. Bristol: Channel View Publications.
- Hallett, Richard W. and Judith Kaplan-Weinger (2010) *Official Tourism Websites: A Discourse Analysis Perspective*. Bristol: Channel View Publications.
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse, *Language* 56: 251-299.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』東京：大修館書店。

- Ikegami, Yoshihiko (1990) 'HAVE/GET/MAKE/LET + Object + (to-) Infinitive' in the SEU Corpus.
国広哲弥教授還暦退官記念論文集編集委員会(編)『文法と意味の間—国広哲弥教授還暦退官記念論文集—』: 181-203. 東京: くろしお出版.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』東京: くろしお出版.
- 影山太郎 (2021) 『点と線の言語学—言語類型論から見えた日本語の本質—』東京: くろしお出版.
- 観光庁「観光白書(令和3年版)」(<https://www.mlit.go.jp/statistics/content/001408960.pdf>)、
(<https://www.mlit.go.jp/statistics/content/001408961.pdf>) (2021年9月24日閲覧)
- 近藤安月子 (2018) 『「日本語らしさ」の文法』東京: 研究社.
- 久野 暉・高見健一 (2005) 『謎解きの英文法 文の意味』東京: くろしお出版.
- Pierini, Patrizia (2009) Adjectives in tourism English on the web: A Corpus-based study, *CÍRCULO de Lingüística Aplicada a la Comunicación* 40: 93-116.
- Prince, Ellen F. (1992) The ZPG letter: Subjects, definiteness and information-status. In: William C. Mann and Sandra A. Thompson (eds.) *Discourse Description: Diverse Linguistic Analyses of a Fund-raising Text*, 295-325. Amsterdam: John Benjamins.
- Rosypalová, Jana (2012) *Language of Tourism: Corpus Analysis of Spoken Discourse of Tour Guides and Written Discourse of Tourism Guides*. Saarbrücken: LAP LAMBERT Academic Publishing.
- 斎藤伸治 (2001) 「無生物主語構文について」『アルテス リベラレス(岩手大学人文社会科学部紀要)』68: 83-93.
- 砂川有里子 (2005) 『文法と談話の接点—日本語の談話における主題展開機能の研究—』東京: くろしお出版.
- 田窪行則 (2010) 『日本語の構造—推論と知識管理—』東京: くろしお出版.

映像資料

- Core Kyoto (2021年9月30日放送(NHK BS1))
- Core Kyoto (2021年10月14日放送(NHK BS1))
- Journeys in Japan (2021年10月13日放送(NHK BS1))
- Trails to Oishii Tokyo (2021年10月8日放送(NHK BS1))